

『阿弥陀経疏鈔』と『禪関策進』の関係

石上 壽 應

雲棲株宏は、禪・淨・律の三教学の大家として知られるが、本発表では『禪関策進』と『阿弥陀経疏鈔』の二書を中心として、その前後に著述された『答浄土四十八問』と『竹窓随筆』も踏まえて、株宏一代の念仏觀を事理による解釈と彼の念仏に対する心構えの二点に着目して考察した。

最初の『答浄土四十八問』では、身名の念仏つまり身体を觀想しかつ称名の事の念仏と、心性の念仏つまり自性弥陀・唯心浄土へと帰着する理の念仏の二種を挙げ、根底には事理双修すべきと考えているものの、当寺は理よりも事に傾いた念仏をするものが多いことに危惧を抱いていた。また念仏に対する心構えは、臨終十念往生を認めた上で、さらに日常からも念仏を怠ることないよう心かけるとともに、その一念一念を專一にすべきことを求めている。

次に『阿弥陀経疏鈔』では、『阿弥陀経』の「一心不乱」を事の一心と理の一心に分別して詳説しており、事の一心を憶念、理の一心を体究に相当させ、理の一心を上位概念として設定している。しかし理の一心だけによる開悟は困難であるが、事の一心による浄土往生は可能であるとして、一転して狂禪に奔る者を非難するのである。株宏があたかも矛盾するかのような記述をするのは、本書が強く浄土教を信仰する者に対してだけでなく、禪者に対しても浄土教を宣布するために説かれたものであるからであろう。また株宏は自らを「末法下凡」とも称しており、

簡単には開悟できるはずがないという確信があったのだろう。そのため事理双修を建前としながらも、どちらか一方にしか精進できないのであれば、理に執着するよりは事に執着する方がまだましであると主張するのである。これは絶えず念仏することで往生が決まっていることに加え、念仏相續することが禪定に入るための手助けとなっていることも要因の一つとして挙げられる。

中期の『禪関策進』は禪の修行者の入門書であるため、上の二書のよりに念仏に深く触れた書ではないが、試みに本書に説かれる念仏を事理に分別すると、末尾に締めくくりとして、「須知念字從心、佛即自己。以自心念自己。烏得為外求也」(『大正藏』四八・一一〇九・a)と述べていることから、理の念仏あるいは参究念仏による自性弥陀・唯心浄土が最も主張したいことであつたと推測されうる。一方禪定に入る手段としての事の念仏に精進すべきことは三か所でのみ見られ、全体数より見ても強く主張しているとは言い難いが、ただただ念仏に精進すべきことを説く章は他にも見受けられる。本書の主眼は修行への精進にあるので、参禪であれ、公案であれ、念仏であれ、とにかく精進すべきことが求められており、本書に説かれる念仏は禪定に入るための手段、あるいは見性に至るための手助けとしての精進の念仏であるとも捉えることができる。

最晩年の『竹窓随筆』は随筆調であることから事理による解釈は見いだせない。そこで晩年の株宏の念仏に対する心構えを再確認すると、「精勤」という言葉を用いて説明している。「精」つまり専一であれば心が散乱することがなく、「勤」つまり勤め励めば心に間断なく念仏することができるのである。株宏の心構えはこの言葉に集約されており、念仏に限らず仏道修行において欠かすことのできない徳目として称揚されるべきものとなつていると言える。

以上、時系列的に株宏の念仏觀の変容あるいは一貫性を見てきたが、

事理の分別による解釈では、『答浄土四十八問』↓『阿弥陀経疏鈔』↓『禪  
関策進』と続く中で、一見するとその強調する内容が理↓事↓理と変容  
しているかのように思われる。しかしこれは念仏観の変容と捉えるべき  
ではなく、著作によって説かれた対象が変化したに過ぎないと言えるだ  
ろう。株宏にとつて事理双修は大前提として存在している上、当時の仏  
教が国家仏教ではなく民衆仏教であったため、民衆に対する現実の答え  
として方法論が多様化したに過ぎなかったのではないだろうか。

また念仏に対する姿勢としては、『答浄土四十八問』から『竹窓随筆』  
に至るまで一貫して、一心不乱に念仏に精進することが求められた。こ  
れは「精勤」という言葉に集約されよう。株宏は今まで教学者と位置付  
けられることが多かったが、念仏に対する姿勢からは修行実践者として  
の側面も非常に強かったという評価もできるだろう。

(大学院仏教学研究科仏教学専攻博士後期課程)